

## エイジングの人類学 : 高齢期と幸せ

後藤, 晴子  
福岡大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/2344484>

---

出版情報 : 九州人類学会報. 38, pp.56-57, 2011-07-10. Kyushu Anthropological Association  
バージョン :  
権利関係 :

2010 年度セッション B

エイジングの人類学  
— 高齢期と幸せ —

後藤 晴子 (福岡大学非常勤講師)

キーワード: 老年人類学、幸福、エイジングの人類学

いわゆる大衆長寿化社会の実現によって、高齢者 (または高齢化社会) の問題がクローズアップされるなか、人文・社会諸科学においても福祉 (制度)・介護・生きがいといった様々な問題が議論されるようになった。これは文化人類学においても (他の社会諸科学に少し遅れる形ではあったが) 近年同様に広がりを見せている。そこでは非西洋諸国の老いの姿を肯定的に捉えたうえで、それぞれの文化を独自に / 通文化的に研究する [KEITH 1990, FRY 1996 など] 従来の老年人類学の議論には収まりきれない議論が展開され、より実践的で具体的な研究が活発に行われている。もちろんこれは老年学という学問の由来を考えれば当然のことである。だが、その一方でエイジングの事象そのものを考察するような視点は、どこか遠のいてしまっているような気もしている。現場の問題に即応できるような実践的な調査研究が重要であることは言うまでもないが、エイジングという現象そのものを考察しようとするような、より大きな視野をどこかで保持していくことも重要ではないか。

ここではエイジングに関わる研究が持ちうる命題の一つの可能性として、「人がどう幸せに生きるのか」という問いを掲げる。エイジング (= 老いる) という問題が、生きることの先に (もしくは中に) あるとするならば、たとえそれが福祉であれケアであれ、生きがいの探求であれ、そこに「人がどう幸せに生きるのか」という命題を掲げてみることはおそらく不

可能ではないだろう。本セッションでは、老いと死 (後藤)、地域福祉と親密圏 (加賀谷)、親密圏とケアの本質 (福井)、地域社会と道徳 (高橋) 【発表順】を取り上げることによって、これまでの社会福祉の議論とはいささか異なる、新たなエイジングの人類学の可能性を模索することを目的とした。

付記

本趣旨は、セッションのコーディネートを担当した後藤が構成したものであり、他の発表者およびコメンテーターとの異論がある可能性については注記しておく。またセッション当日は今回寄稿した4名による発表に加え片多順氏 (福岡大学) によるコメントが行われたが、紙面等の都合により発表者4名のみでの報告となっていることをあらかじめお断りしておきたい。また報告はセッション当日の発表順に掲載しているが、報告の内容は発表内容をもとに発表者それぞれが再構成したものである。

参考文献

KEITH, Jenny

1990 "Age in Social and Cultural Context: Anthropological Perspectives", Binstock & L. K. George (eds), *Handbook of Aging and the Social Science* 3<sup>rd</sup>. Academic Press, pp. 91-111

FRY, Christine L.

1996 "Age, Aging and Culture",

エイジングの人類学 (後藤、加賀谷、福井、高橋)

Binstock & L.K. George (eds)  
*Handbook of Aging and the Social  
Science 4<sup>th</sup> ed.* Academic Press.

pp.118-136  
(2011年5月11日 掲載決定)